人類滅亡そして・・・

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人類滅亡そして・・・

【Nコード】

N7904P

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

西暦2xxx年。

人類は果てしない発展を遂げ、平和な時を過ごしていた。

しかし、そこに大きな難題がのしかかっている、しまいには国家は滅び、ついに人類が滅亡してしまう。

そして、人類の次の生物が地球を支配する。

その生物とは・・・。

人類滅亡そして……

滝 龍太郎

1

西暦2xxx年。

人類は果てしない発展と共に退屈な時を過ごしていた。だが、人々の生活は潤いに満たされていた。全世界は手を結び、平和な時を送っている。

人間の行う仕事は、各家庭に置いてある端末機で、オフィスの大型コンピュータに指令を送るだけの作業になってしまっていた。

正木豊もその一人である。部屋の机の上には受像機があり、いくつかのスイッチ類が並んでいる。豊はその一つのスイッチを押し、妻のアイリーンを呼び出した。画面はすぐにアイリーンの顔が映し出され、

「おはよー」

と、二人は挨拶を交わした。

人は成人に達すると、その指令のもとで国から管理され、各家庭にあるコンピュータボックスに入り、ある一定の仕事をしなければならぬ。

正木豊も、昨夜から今朝にかけて指令のもとに、仕事を行っていたところであった。

「ケンタの具合はどうだ？」

「まだ熱が少しあるの」

「そうか。こっちは後一時間したら出られるから」

息子のケンタが風邪をひき、介護ロボットが付きつきりで看病

2

をしている。一家庭に一台、必ずこの介護ロボットが置いてある。これは国の義務になっている。

このロボットは国家病院とホットラインで結ばれていて、常にその様子は国家病院に報告されている。

特に子供の場合は特別である。それは子供の数が年々、極端に減ってきているからである。国は子供の減少に頭を痛めている。

国は、子供の居る家庭には多大な利益を与え守ってはいるが、百年位前から、年々出生率が下がってしまっていた。当時は色々な原因があつたが、今では確立された体制の中で容易に子供を産むことができる状態にある。それなのに出生率が下がるということは分らない。何が原因なのか、国としてはあらゆる面から援護をしてきた。その貴重な子供の看護に、介護ロボットは必要不可欠になっている。

毎日、脈拍、血圧、体温計測等全ての計測をし、具合が悪いと診た時は、薬の調合から服用の仕方まで適切な処置をする。ベテラン医師とベテラン看護婦が家に居るのと同じである。更に容体が悪化して、緊急の時にはホットラインですぐに国家病院から本物の医師が飛んで来るようになっていて。

妻のアイリーンは、介護ロボットの話を聞きケンタの顔を覗き込んだ。

「まだ喉が痛い？」

「うん、少し」

「そう。熱が下がってきたからもう少しの辛抱よ」

「早く起きて勉強しなくちゃ」

「そうね、きょう一日休んで明日から頑張ればいいんじゃない」

「うん。そうする」

息子のケンタはまだ七歳。

今の時代は学校へ行って勉強をするということではなく、家庭で国家学校とホットラインでつながっているテレビを見て、勉強するようになっていて。

小学、中学、高校等の段階もなく、年齢別に毎日一定の量をこなし、月に一度試験があり、それによって段階が設けられてある。

家の端末機から配線された金属の帽子をかぶり、画面に出てくる問題を見てその答をスイッチで押し、信号を送るのである。その人間各自の持つ能力のみをフルに引き出し、それを分析し採点するのである。

子供は五歳から二十歳まで勉強をしなければならない。そして成人すると階級別のボックスを与えられ、女性は結婚するまで、男性は一生その中で仕事をしなければならない。

仕事は、替わることも辞めることも許されない。その人その人に合った階級別の仕事なので、さほど難しいことではない。そして仕事の出来に応じて、食料、娯楽、旅行等、国がコンピューターで分析して各家庭にその切符が送られてくる。

正木豊の家庭では、月に十二日働けば後は休みで、旅行切符は火星旅行が月に一回と、月旅行が三回行ける。そして家庭の大型テレビには月に三十本の昔懐かしい映画が送られて来る。

全部で五百段階ある中で、百二十番目の階級がこれである。そして仕事の努力次第で階級を上げることができる。月に十二日の仕事は楽で、一日三時間から五時間くらいボックスの中で様々な機械のスイッチを押すだけである。

そして、自動車や電車等の交通機関は一切なく、外出する時は旅行に行く時とドームに行く時だけである。旅行に行く時は、切符をコンピューターに差し込むと、何秒かで無人の空飛ぶジェットカーが来て自動的に目的地に運んでくれるのである。月や火星等其他の天体に行くことができる。そして、地球内では町単位にある大型ドームへ行つて、友達と会ったりすることができる。ただし、どれも階級で異なっているのである。

正木豊は、明日から一週間休みを取って、家族三人で火星に行くことになっている。仕事を一生懸命やって他の惑星旅行に行くのが、地球人の一番の楽しみ事である。地球の中の旅行はどこも都市

化されていて、カプセル住宅が延々と果てしなく続いているだけなのでつまらない。

山は切り崩されてカプセルが並び、川は単なる雨水の流れで薬づけにされているため、魚はもちろん微生物も住んではない。海岸は全て背高くコンクリートで固められており、陸地からは海は見えない。台風が来ようと、どんなに海が荒れても被害は何もない。

このように天災などは何もないが、現代社会は非常に味けないものになっていた。

何百年か前、今と同じ様に出生率が低下し、国ごとに産めや増やせと膨大な人口を有したことがあった。そのため、人々は食料を確保するのに精一杯で、娯楽産業を一切廃止し、食料生産に国ごとが一丸となって走って来た。そして、産めや増やせの時代が終わり、百年くらい前から、今度は出生率が極端に下がって来た。その原因は極端に人口を増やし過ぎたため、妊娠を抑制するPXという薬を乱用したことで子供の数が減ってしまったのである。

又、同時に、昔絶滅したはずのポイズ菌という血液に巣食う病気が再び姿を現したからである。当時は大変な病気で、これにかかると直す薬がなく、ただじつと死を待っているだけであった。

その後、国は一つに統合され、第一優先でポイズ菌を殺す薬の開発に全力を注いだ。

そして長い年月の末、ついにポイズ菌を殺す薬が開発され、それからはポイズ菌に侵されても軽い病となり、ポイズ菌は絶滅の一途を辿った。

しかし、それは絶滅したのではなく、ごく一部の人間の血液の中に、開発された薬をも跳ね返す強力な菌に育っていた。この新ポイズ菌はあつという間に全地球に広がり、蔓延してしまった。

この新ポイズ菌を殺す研究も既に長い年月が経ち、半分は殺すことができて来たが完璧なものを作るため、国家研究所が躍起になって研究をしていた。

「それは本当かね？ 大変な事態だぞ」

国家主席は厚生大臣のピエールの報告を聞き、唸ってしまった。国は人口問題に付いて真剣に取り組んでいる。ピエールからの報告書には、十年ごとに実施されている人口に関するものが記載されていた。

最近の十年間については人口減少が著しく、出生の数が前の十年間の約半分になっており、死亡の数は約倍になっている。死亡原因のトップは新ポイズ菌に侵されて死亡した者が一番で、次にストレスからの精神障害で亡くなった者が続き、最後には僅かながらの老衰である。

事件事故等で亡くなる者は殆どなく、普通の病気で亡くなる者も殆どない。新ポイズ菌以外の病気は全て直ると言っても過言ではなくなつたのである。

「陳、薬事大臣」

「はい」

「新ポイズ菌をやっつける新薬はまだできないかね？」

「ご承知のように新ポイズ菌にはA型とB型がありまして、以前のポイズ菌に似てるのがA型です。そのA型はこのZワクチンで死ぬのですが、B型には作用しません。今B型の分析を急いでやっていますので、結果が出るまでもう少し待つて下さい」

「そうか。ところでピエール大臣、子供の出生の方はどうかね」

「はい、こちらの方も良くありません。年々悪く、去年の一年間を見てみますと、前年の三分の一に落ち込んでいます」

「死亡率が増え、出生率が大幅に落ちている。このままでは人が居なくなるぞ。子供が居る家庭にはもっと多くのメリットを与えなさい」

「はい、分かりました。・・・それと主席」

「なんだね」

「もう一つ、気になる報告が来ているのです」

「気になる報告？」

「ええ。出生件数の落ち込みが気になりまして、東A～Dの地区を対象に調べさせたのですが、妊娠を抑制してないのに妊娠をしない家庭がかなりありまして」

「なに！ どう言うことだ？」

主席が大きな声を出した。

「それでそれらの家庭を細かく調査した結果、妊娠をしない家庭の九十％は前に何度かPXを服用していたということが分かったのです」

「PXを？」

「そうです。PXの長い服用が妊娠の妨げになっているのではないかと、薬事大臣にPXの分析を頼みました」

ピエールが陳の顔を横目でチラツと見た。

「陳大臣、どうなのかね」

「はい。PXは妊娠を抑制する薬ですが、長い期間は通用しないようにできています。ピエール大臣からの要望でもう一度詳しく分析してみたのですが、やはり体内に入ってから短い人で三日、長い人で五日位でその効力はなくなるようになっていきます」

「なるほど」

「しかし、PXを服用していた者が圧倒的に多いという点では納得がいきませんので、更に違った角度の分析を行っております」

「ピエール大臣、東のA～Dの地区と言ったが、そこは特異な地区ではないだろうか」

「はい、一般的な地区です」

「そうか、それではその他の地区も調べてみる必要があるな」

「はい、今調べさせております。結果が出しだい報告致します」

国家大臣会議は人口問題に大きく揺れていた。

「バラモ」

「はい、女王様」

「上の者たちの様子はどうだった？」

「はい、何でも変な病気が流行しているとかで、大変な騒ぎです」
「変な病気？」

「はい、沢山の人が死んでいます。なかなか手ごわい病気のように
す」

「その病気は我々には移らないのか？」

「目下調べております」

バラモは手下のビンに、いつ頃分かるのか聞いた。

「はい、バラモ様。今、実態を探っておりますのでもう暫くお待ち
下さい」

「とにかく早くしてくれ」

「はい」

「実態が分かり次第、知識者のサリユートに詳しく報告するように。
分かったな」

「はい、分かりました」

バラモが女王様に向って言った。

「まだ実態が掴めておりませんので、早急にどんなものか、私も一
緒に調べてみます」

「バラモ」

「はい」

「気をつけて参りなさい」

「ありがとうございます」

女王様のありがたいお言葉を戴き、バラモは手下のビンと、女
王様の部屋を出た。

「その変な病気の核は取り出せたのかね？」

バラモがビンに聞いた。

「はい、取り出すことはできたのですが何とも奇妙な核でして、分

析が難しく困難を極めています」

「そうか」

バラモが腕を組んだ。

二人は完全密閉室の前に来て、殺菌シャワーを浴びて中に入った。部屋の真ん中に低いテーブルがあり、科学者たちが何人か囲んでいた。テーブルの上には、瓶に入った白い色と赤い色の液体が置いてある。

「この白と赤の液体は何なのだね？」

バラモが聞いた。

「はい、ある病院で妙な病気の持ち主が、口から吐いた唾と血を持ち帰ったものです」

若い科学者が答えた。

「そうか、それは大変だったな」

バラモはよくやったと感心した。

「少しでも何か分かったら、サリユートに相談して、その結果を報告するように」

「はい、分かりました」

科学者たちにそう言い残すと、バラモとピンは再び殺菌シャワーを浴び、部屋から出た。

翌日、バラモはピンを隊長とする一団と一緒に、その病院へ向かった。その病院はかなり大きな病院であった。まずは待ち合い室でそれらしい病氣の人を探した。

「どんな症状なのかね？」

バラモがピンの部下に聞いた。

「手や顔に、黒い斑点が出ている患者がそうです」

「なるほど。それらしい患者が何人か居るな」

「はい」

近づこうとするバラモにピンが止めた。

「危険です。まだ実態が掴めていませんので、この辺までにして下さい」

「そうか。でも違う病気らしい患者も一緒に居るけど大丈夫なのかね？」

「さあ、それは分かりませんが。ここからでも伺うことができますから、少し様子を見ましよう」

「では、そうするか」

ピンはほっとした。バラモに何かあったら大変である。バラモは目を凝らして、顔に黒い斑点のある患者を斜め下から覗いている。なるほど。精気がまるでないな」

ピンに聞いていた通り、憔悴しきった顔に窪んだ目、まだ年は若そうだが頬の肉はたるんで垂れてしまっている。そして、黒い斑点がその垂れている肉により多く点在していた。

死に向かつて歩んでいる何人かの患者が静かに座っている。黒い斑点の無い患者も目を虚ろにしている。おそろく同じ病気に掛かっているのかも知れない。まだ初期のため、斑点が出ないのだろう。

バラモはキョロキョロしながら、何人かの患者を遠目で見た。

「バラモ様そろそろ時間です。ビリーたちが戻って来る頃です。玄関の所へ行きましょう」

ピンはバラモの前に立ち、巨大な病院の玄関へと進んだ。玄関の前には、医務室の様子を探りに行ったビリーたちが既に待っていた。

「ビリー、どうだった？」

「はい」

「バラモ様に報告してくれました」

ピンはビリーにそう言い、直接バラモに報告するように言った。「はい。報告します。医務室の中は皆点滴をしていて、医師が症状を見て回っています」

「どんな点滴をしてたかね？」

「はい、真っ白な液体でした。サンプルを少し戴いて来ましたので見て下さい」

ビリーが白い液体の入った瓶をバラモに見せた。
「これか」

バラモは目にかざして白い液体を凝視した。

「ビン」

「はい」

「これをさっそく分析してサリユートに報告するのだ」

「分かりました」

ビンはそれを受け取り、大事そうに抱えた。

「医師は患者にどんなことを話してたかね？」

バラモがビリーに質問した。

「はい。この点滴をしていれば、運次第では直ることもあると言っていました」

「運次第か。そして患者は？」

「患者の方は諦めてるのか、殆どの者はただ頷くだけで口は開きませんでした」

「患者は直らなくて当たり前だと思ってるんだな。医師も同じ気持ちでは、患者は何も言えんな」

バラモは顔を曇らせた。

何と言う不確実性だろう。急成長した生活の中で、いつの間にか自分を失ってしまっている。ただ時の流れに歩んでいるだけで、人間は何の創造力も持たず、じつとレールの上を走らされているだけである。非常に嘆かわしいことだとバラモは思った。

そしてバラモたちは病院を後にして、宮殿に戻った。バラモは女王様に見て来た全てを報告した。人間の無気力な状態を嘆かわしい事実として、自分の感じたままを話した。

「大変な状況の中、よく調べてくれました」

女王様はバラモに慰めの言葉を掛けた。

ビンはさっそく科学者たちを集め、白い液体の分析にかかった。一方、サリユートは患者が吐いた唾と血の分析結果の報告書を丹念に読み、いくつかの特徴を拾い出していた。それは、昔流行し

た病気の菌と似ているが、抵抗力の度合いがかなり違っていた。
ピンたちが持って来た白い液体で、この強い菌が減んでくれれば
いいのだがとサリユートは祈った。

4

陳薬事大臣からの報告では、PXの乱用と現代社会の倦怠感から来るストレスで、不妊症になるケースが多いと、厚生大臣のピエールは国家主席に出生の低下の原因をこう説明した。それと、妊娠しやすくなるという薬を研究中だと話した。

「急いでその薬を開発したまえ。それとストレスを取るように、国民に十分な休養を与えるように」

「はい、分かりました。階級制度の方は、かなり緩やかにしました」

「後は、そのPXの反対の薬が早くできることだな」

「そうです」

「新ポイズ菌の方はどうかね？」

「はい。新薬の研究が着々と進んでおります。A型を殺すことのできるZワクチンの改良型を、B型の患者に試しております。徐々に菌の数値が下がる者が出て来ておりますので、あと少しで完成するものと確信しております」

新ポイズ菌の方の研究はかなり進んでいるので、ピエールは胸を張って答えた。

「それは良かったです。一日も早くこの菌の絶滅を期待しております」

「はい」

ピエールは主席の部屋を出て、薬事大臣室へ向かった。部屋に入ると、陳大臣を囲んで何人かの科学者たちが議論をしていた。

陳がピエールの顔を見て、

「ピエール大臣、こちらへどうぞ」

と言って、手を差し出した。

「いや、忙しそうだから」

「ピエールは帰ろうとしたが、

「いや、どうぞどうぞ。ピエール大臣にも聞いてもらいたいことなのでちょうど良かった」

陳がピエールを引き留めた。

「今、新ポイズ菌について議論をしていたところなんです」

「そうですか」

「ご承知のように、Zワクチンの改良型でかなりの患者の数値が下がっています。ところがまるつきり効かない患者もいます。なぜ効かないのか詳しい分析の結果、新ポイズ菌の中でも特殊な菌でA型でもB型でもない、新種の菌が発見されたのです」

「何だって！」

ピエールは目を丸くして陳を睨んだ。

「その菌は今までの菌とどこが違うんだ」

「Zワクチンの投与で菌の細胞が側面から徐々に死滅して行ったのに、今度の菌はびくともしない。細胞の型が前のポイズ菌に似てはいるが、その生命力と言ったら比べものにならないくらいです」

「なるほど。ポイズ菌が進化して新ポイズ菌に成り、又、元のポイズ菌に戻ったわけか。しかも強力な力を持つて」

「そうなんです。元のポイズ菌の細胞の回りに、防御膜を張ったようなものです。かなり強力です。この強力ポイズ菌に、昔使ったポイズ菌を殺したワクチンと、新ポイズ菌に使ったワクチンを混合したりして実験を試みましたが、効果はさっぱりでした」

「うーん」

ピエールは腕組みをして唸ってしまった。

「この強力ポイズ菌の保菌者はどのくらい居るのかね？」

「はい。地球全人口の十分の一は居ると思います」

若い研究員が答えた。

「何、十分の一も。新ポイズ菌の保菌者は？」

「はい。新ポイズ菌の方は、報告されているだけで約十分の三です」

ピエールは恐る恐る陳に振り向いた。

「現状では新ポイズ菌の保菌者の中で、強力ポイズ菌を持っている者はその三割くらいだと思います。と言うことは、地球全人口の十分の二、つまり二割の人は助からないでしょう」

陳が静かに答えた。

「二割の人口減少と出生率の超低下では、この先どうなるのか」

ピエールが頭を抱えた。

「ピエール大臣」

陳が申し訳なさそうに声を掛けた。

「PXと不妊の件ですが」

「ああ」

ピエールは絶望の顔を隠せないでいる。

「ご存じの様に、PXは妊娠抑制のために服用するものですが、その効力は約五日。もちろん人によってまちまちですが。その後は何の効力もなく、ごく普通に妊娠するわけなんです。PXの長い服用によって妊娠能力が落ちるものなのか、調べた結果が出ました」

ピエールはただじつと聞いている。

「あらゆる地区の女性から、PXの服用したことのない人、何回か服用したことのある人、長い間服用したことのある人と、三段階に分けて十万人づつ、合計三十万人の人の卵子を調べた結果、卵子に異常が見られたのは、長い間服用したことのある人が約九十%、何回か服用したことのある人は約二十%、服用したことのない人は約〇・五%という結果になりました」

「やっぱり長い服用に問題があつたわけか」

「そうです。でもそれ以外の女性たちは妊娠してもいいわけなんです。それがしないのです」

「何か別の問題があるか？」

「ええ」

陳は顔を曇らせた。

「服用したことのない人の〇・五%に興味を持ち、調べてみました。なぜ服用してないのに異常が見られたか、その人たちの生活環境等、

全ての調査をしてみました。子作りに励んでいる三十万人の内、服用したことの無い十万人の内の約〇・五%、その数、約五百人です。地区もバラバラです。と同時に、残りの約十万人の人たちも、なぜ妊娠しないのか徹底的に調べてみました」

ピエールは手帳に陳の言った数字を書き込んでいる。

「まず異常のあった五百人については、何も他からの影響は受けてなく、なぜ卵子に異常が発見されたのか分かりません。それと異常のない残りの人たちも、他からは何の影響も受けてなく、ごくごく一般的に生活をしている人たちであり、妊娠をしない根拠は何も見つからないのです」

「と言うことは、PXを長く服用している人たちには九十%の異常が見つかった。これは明らかにPXの副作用と分かるが、それ以外についてはどう解釈をしているかね」

「おっしゃる通り、PXの副作用で長い間服用していた人たちは絶望的ですが、服用をしていない人たちについては解せないのです」

ピエールは陳の顔から目を逸らし、若い研究員の方に顔を向けた。

「君たちの意見は？」

「はい。今度は同じように男性の方を調べてみてはいかがでしょう」と言うこと？」

「はい。PXの副作用で妊娠しないということは分かったわけです。そして、服用してない人も妊娠しないし、卵子に異常が発見された人はごく僅かです。と言うことは、男性の方に問題があるのではないのでしょうか」

「そうだな、その通りかも知れんな。陳大臣はどう思うかね」

「ええ、その可能性は充分にあると思います」

「では、その調査を至急実施してみてください」

「はい。分かりました」

ピエールは薬事大臣室を出た。頭の中は混乱している。

正木豊の家庭も、ケンタの下にもう一人子供がほしいと子作りに励んでいるのだが、妻アイリーンは一向に妊娠しないのである。

今も介護ロボットに妊娠の有無を確かめさせたところである。

「不妊病にかかったのかな？」

国が発表したことを、豊がアイリーンに話した。

「でも私はPXを服用したことはないし、ケンタの時に異常はなかったわ」

「国の発表では女性だけの問題ではなく、男性の機能にも問題があるかも知れないと言っている。人間の本来持つ闘争本能や、生殖本能などが現代社会には失われつつあり、人間の体のある部分が退化して来ているのかも知れないと言っていた。それと、人間の心の中、単純な仕事の上にもあまりにも平和な日々を送っていると逆にストレスが蓄積されるらしい。それに伴って無気力になり、体の一つ一つの機能が正常に働かなくなっているとも言っている」

「怖いわ」

「人間はこれ程までの文明社会を作ったことについて、これ以上の意欲というのが徐々に薄れて来てしまっている」

「それが無気力になって行く原因なのね」

あまりにも平和すぎて人間の持つべき本能が失われて来ていることは、アイリーンとて実感していた。

「とにかく二人とも検査してもらおう」

「そうね、明日にでも検査してもらいましょう」

実際、不妊病の疑いのある夫婦は男性も病院で診てもらおうよう勧めている。

その後、国は様々な区域から十万人の男性を検査した。その結果、精子に異常もしくは変形した形のものが発見されたのである。驚いたことにその割合は八十%に達した。残りの二十%の人についても、大部分が精子の生命力がかなり弱いと発表された。

二十%の中から強い精子の保有者はごく僅かである。そのごく僅かの精子が正常な卵子と合体しなければならぬ。この事実を踏まえてみると、ほんの微々たる確率しか妊娠しないと断言することになる。

正木夫婦も例外でなく、妻のアイリーンには何の異常も発見されず、夫の豊の精子に弱力現象が見つかったのである。

コンピューターの画面に、最近頻りに国からのメッセージが送られて来るようになって来た。内容は、男性も女性も十八歳以上全ての人に、病院で生殖機能の検査を受けること。それと新ポイズ菌及び強力ポイズ菌の保菌者の数をこれ以上絶対に増やさないよう呼びかけていた。

この二つのことをしつこいくらいに仕事を妨げ、我がまま顔に画面に入ってくる。時には国家会議の模様なども飛び入り、全ての人にこの緊張感を持ってもらいたいと呼び掛けて来ていた。

6

ピンたちが持ち帰って来た白い液体の分析結果を、サリユートは研究室から詳細を聞いた。

「この薬では、この菌を殺すのは不可能だと思います」

薬の入っている小さな瓶を指差し、科学者がサリユートに報告した。

「この菌の特徴は？」

サリユートが聞いた。

「はい、以前流行した菌に似てましたが、その成長力は比に及びません。その白い液体は確かに強力で、菌は一瞬ひるんで縮小しながら滅びるのですが、滅びる前に違う核を作り出すのです。そしてその核は急成長します。その繰り返しですから全て殺すというのは不可能だと思います」

「そんなに成長力が凄いのか」

「はい、凄まじい早さです。ですから、この白い液体で成長している数を死滅する数が上回れば病気は直るでしょう」

「これが運の別れ道か」

ビリーが言っていたことは、このことだとサリユートは思った。

「この菌の巣食う場所は？」

「はい、以前の菌と同じように赤血球の中に巣食います」

「赤血球だけだな」

サリユートが念を押した。

「他の組織では生きて行けないことは実証しました」

研究班のリーダーが答えた。

「そうか、安心した」

サリユートは安堵の表情を浮かべて、

「ご苦労さま」

と言って、報告書を手に持ち研究室を出た。その足でバラモの部屋に行き、今聞いたことを説明した。

「そうか、良かった」

バラモは頬を緩めて、サリユートと喜び合った。

「こういう菌の発生がどうして起こるのか知っていますか？」

サリユートがバラモに聞いた。

「いや、私には全然分かんが」

「人間の快樂とでも言いましょうか、無限の欲から出たものなので。その昔、金儲けのために乱れた性社会を迎え、なりふり構わず快樂一辺倒に走ってしまい、それまではごく一部の者しか保菌者は居なかったのですが、そのために一気に爆発して世界各地に広まってしまったのです」

「馬鹿なことを」

バラモがあざけ笑った。

「そして色々な薬を作り成功して来たが、一部の菌は抵抗力がついて強くなって行ったのです」

「菌も殺されてたまるかと、戦いを挑んだのだな」

「そうです」

サリユートが人間の悲しき性をバラモに説明した。

「何と、寂しいものだ。そんなことでは必ずいつかは滅びるのである」

「おつしやる通り。昔は殺し合い、平和になれば快樂を貪り合う。」

そして、変な菌が蔓延し、やがては滅亡するであります」

「そうだな。そんな状態では遅かれ早かれ、何れはそうなるだろうな」

「ええ、その時が見ものです」

サリユートとバラモはニヤツと笑った。

バラモは早速、女王様に今回のことを話した。女王様は驚いた。何れ来るであろうと思っていた我々の時代が、時は早いのではないかと女王様は思った。

この巨大な王国のために、他の同族に会議を催す伝令を出すようバラモに命令した。

7

緊急国家大臣会議が開かれ、強力ポイズ菌と出生に関する件で議論がぶつかり合った。

「薬事大臣」

国家主席が聞いた。

「今の段階では強力ポイズ菌を死滅させる薬は無理かね？」

陳薬事大臣は憔悴しきった顔で答えた。

「はい、現段階では構造が解明できたところです。これを一つ一つ分析して、あらゆる実験を試みておりますが、まだ菌を死滅させる薬はできておりません」

「そうですか」

国家主席は寂しそうに頷いた。

「厚生大臣、現時点の保菌者の数と現状を説明して下さい」
「はい」

ピエール厚生大臣は椅子から立ち上がり、皆の顔を一瞥した。
「現時点の強力ポイズ菌の保菌者は、全地球人口の約十分の一。この数は徐々に増えて来ています。新ポイズ菌の保菌者は約十分の三で、その中の三割は強力ポイズ菌の保菌者と推測されております。こちらの方は今調べております」
「ちよつと待って下さい」

自治大臣の石橋が手を上げた。
「何でしょう？」

ピエールが石橋に顔を向けた。
「今の話ですと、全地球人口の十分の四はどちらかの保菌者と言うことですか？」

「そうです」
「信じられん。急激な増加ですね」
「その通りです。急激な増加です」

ピエールが石橋を凝視した。石橋は口をへの字に曲げ、腕組みをして黙ってしまった。「続けます」

ピエールが一堂を見渡した。
「つまり、全地球人口の二割の人は強力ポイズ菌にかかっており、ただ死を待つだけです。後の二割の人は、直るか死ぬかじつと点滴をして判定を待っている人たちです。残りの六割の人間が世の中に出ているわけですが、この数も徐々に減って来ているのが現状です」

ピエールが熱い口調で語った。
「今、厚生大臣から聞いた数字では、この状態で進むと全地球の運営についても俛ならぬ事態に陥る」

国家主席に替わった。

「そこで、菌を絶滅したいが薬ができないことにはいたしかたないが、菌の増加は止めることはできると思う。そこで、何かいい案を

出してもらいたいです」

「主席」

「はい、環境大臣」

環境大臣のオットーが手を上げた。

「赤血球を食い荒らすこの菌の流通は、乱れた性社会から移るわけです。これ程注意を促しているのにまだ増加しているというのは、根を絶たなければいけないと思います」

オットーが怒ったように言った。

「と云うと？」

「まず、保菌者は分かっているのですから、社会から完全に隔離させる」

ドーツと会場内から声が上がった。

「それは無理な話だ」

別の大臣が声を荒げて言った。

「いや、無理な話かも知れないが、ここまでやらなければ人類は滅亡しますよ」

オットーが声の調子を上げた。

「今は四十%だが、五十%、六十%と増えて行ったらどうしますか？ 仕事どころではなくなりますよ」

「環境大臣の言う通り、仕事どころではなくなります」

国家主席が口を出した。

「何か策はありますか？」

「はい。他の惑星にそのような施設を建設して、そこに收容したら考えたのですが、それには時間が足りないのです。そこで、町単位にある大型ドームを一時的に收容する場所にしたらどうかと思うのですが」

「なるほど。收容も町単位ですれば間に合う大きさだ」

国家主席が頷いた。

「建設大臣、どうかね？」

「はい」

建設大臣のミトロが答えた。

「大型ドームの中では、一つの町の半分は収容できるようになっています。そして、その中だけで十年は生活して行けます」

「そうか、やるうと思えばできるわけだな」

「はい。寝る所を作るのに若干の時間は必要ですが」

「主席」

オットーが手を上げた。

「環境大臣」

「大型ドームへの隔離はこれで可能かと思えます」

「主席」

ピエールが手を上げた。

「厚生大臣」

「環境大臣の言う通り、これ以上の増加を防ぐために四割の人間を隔離して、ドーム内で頑張ってもらいましょう。薬ができるまでは、いたしかたないと思います」

「分かった。他の者はどうかかな？」

国家主席が一堂を見渡した。誰からもそれについての意見は出なかった。

「それでは一つ一つ問題を解決して行こう。まず、ドーム内に隔離をするかどうか決を取りたい。賛成の者は手を上げて下さい」

さっと全員の手が上がった。さきほど反対していた閣僚も手を上げた。

「それでは、環境大臣の提案された、ドームに保菌者を隔離することに決定します。続いて、いつどうするか決めたいが」

「はいっ」

建設大臣のミトロが手を上げた。

「ドーム内で生活をするためには、個々の住居と診療室などを作るのに、建設ロボットをフル可動させても最低一カ月は掛かります」

「建設工事に一カ月か。厚生大臣、診療施設の方はどのくらい掛かるかね？」

「現存のを移転するわけには行きませんので、新たに作ったとして一カ月あれば充分です」

「よし。早速取り掛かるう。後は各々の省庁で検討して、至急報告書を提出するように。では、この件についてはこれで終わりにしますが、何か意見はありますか？」

移転のやり方など、様々な意見が出たが、それも各省庁で具体案を出してもらうことで、この件についての話し合いは終わった。

「それでは、次の問題に入ります。ご存じのように、出生の件数が極端に減って来ているという事実。子供が欲しくてもできない夫婦が多数を占めているという事実を。厚生大臣、発表して下さい」

「はい」

ピエールが、分厚いノートをめくった。

「PXの副作用で不妊病になったのは、卵子に異常が出たことなのでこれは別として、PXの服用がほとんど無い多数の女性を検査したところ、異常はごく一部についてのみしか発見されませんでした。つまり妊娠しておかしくない卵子なのです。そこで今度は十万人の男性について検査をしました。あらゆる分野の男性をです」

ピエールは、一冊の分厚いノートを掲げ、一堂を見渡した。

「ここに驚くべき結果が報告されております。約八万人の男性。実に八十%の精子に異常が発見されたのです」

エエーッ。

皆一斉に声を上げた。

「しかも残りの二十%の精子も、百分の一くらいの人しか授精能力がないのです」

「何！ それでは殆どではないか」

自治大臣の石橋が大声を上げた。

「そうなんです」

国家主席が口を出した。

「実に十万人の内、二百人くらいの人だけが正常で、その数も後の検査では減少しているとの報告が来ている」

「厚生大臣」

石橋がピエールに向かって手を上げた。

「今、どのくらいまで検査は進んでいるのでしょうか？」

「全地球人口の二割ほどです」

「全て終わるには、後どのくらい掛かりますか？」

「そうですね、検査ロボットを全力投入していますが、後一カ月は最低掛かると思います」

「そうですね」

石橋は目を伏せた。

「で、原因は何ですか？」

商業大臣の倉田が、ピエールに聞いた。

「確定的ではないですが、平和的無欲求から来る無気力が原因ではないかと考えられます。あまりに平和的すぎて、逆のストレスが体に蓄積されてしまう。それに伴い精子の闘争本能が無くなり虚脱状態に陥ってしまったている」

「それは大変だ」

倉田が主席に顔を向けた。

「そうですね。実は私も検査の結果、駄目だと出ました」

主席は心なしに寂しい顔をした。

「そうすると、一カ月後には何%の人間が大丈夫か、分かるわけですね？」

倉田がピエールに聞いた。

「ええ、分かります。それはあくまでも正常な精子であるが、授精をするには正常な卵子に出会わなければなりません。正常な卵子が減少しない内に授精させる。それと、異常な精子は正常に戻さなければなりません」

「現在、正常な精子に戻すため、色々なストレスの解消法を考えております」

体育大臣のツルガノフが口を開いた。

「先日、厚生大臣よりストレスの解消法を幾つか考えておいてくれ

と頼まれまして、色々と実験をしております」

ツルガノフは何枚かの写真を手に取り、皆に見せた。

「これは、水中の中で何日も暮らしているところです。三日毎に、体の全てを検査しております。もちろん、精子もです。これは、高い山に登る想定で後ろに昔撮った山の写真があり、酸素を薄くした部屋で重い荷物を背負い、一時間ぶっ続けで歩いているところです」
それらの写真の中には、地中の中で暮らしている者や、気球に乗っている者、逆立ちをしている者、何人かの裸の女性の中にいる者、多種多様な形の男たちが写っていた。

「結果はいかがですか？」

自治大臣の石橋が聞いた。

「まだ日が浅いので結果は出ておりませんが、精神的ストレスを肉体的ストレスに替えれば、必ず何か反応があると思います。本来の人間の姿に戻りさえすれば精子も活力を見い出してくれると考えられます」

「ぜひ成功してほしい。他に何か案があれば、何でも言ってほしい」
ピエールが皆に願った。

色々な議論が飛び交った。その中で、かなり危険な事をする意見も出たが、それは動物実験をしてからと、意見が一致した。

そして、一カ月後に議会を再開することとしたが、この一カ月があらゆる意味で大変な一カ月となる。

8

各々の町にある大型ドームの中では、生活できるよう工事が急ピッチで進んでいる。人々のレクリエーションはなくなり、色んな分野に人が駆り出され、仕事の量は以前の何倍にもなってしまった。それでもだれも文句を言う者はなく、元気な者はすすんで病気の者を助け、地球全体が一丸となって突き進んで行った。

又、全ての人が検査に望み、何十万とある町から、国家の大型コ

ンピューターに入力され、国家大臣会議でその結果が発表されることになっている。

ドームが完成すると、ポイズ菌の保菌者は全て大型ドームの中で生活をしなければならぬ。家族とも、恋人とも、菌が死滅しないかぎり二度と会うことはできないのである。

人々は不安におののきながら今回の国家大臣会議を待ち望んだ。今回の国家大臣会議は、各家庭の端末機に生中継されることになった。これは全地球人に事の重大さを新たに認識してもらったためである。と同時に、全地球人が考え直さなければならぬことだからである。もちろん、月や火星等他の惑星にいる人たちにも生中継で送られる。

国家主席が壇上に立ち、厳しい表情で本日の会議の趣旨を説明した。そして、全地球人にしっかりと把握するように伝えた。

一段高い所に国家主席が座り、巨大な丸いテーブルに各大臣が顔を連ねている。そして何台ものテレビカメラが、色んな角度に向けられている。

最初に手を上げて切り出したのは、厚生大臣のピエールであった。

「今回の二つの問題は、我が厚生省の管轄となりますので、司会進行は私がさせて頂きます」

ピエールは、一堂を見回して会釈をした。

「頼みます」

国家主席が頷いた。

「ここに各省庁からの報告書が来ております。この報告書に照らしながら進めたいと思います。この会議は地球的規模により、何事も包み隠さず全ての発表をさせて頂きます」

ピエールはもう一度、一堂を見渡した。

「それでは、まず始めに大型ドーム内の生活様式の建設について、建設大臣より伺います」

テレビカメラが建設大臣のミトロに向いた。

「建設大臣、完成具合はどうですか？」

「はい、全てのドーム内の作業は終わりました。いつでも生活ができるようになっております」

「ありがとうございます」

ピエールは満足した顔をした。

「それでは、我が厚生省の次官に診療施設の方を聞いてみます」

厚生次官のクラークが椅子から立ち上がった。

「ポイズ菌関係による、全ての診療施設の搬入は終わりました。いづつからでも患者を診ることができません。医師に助手、看護婦、それに医療、看護、緊急ロボットを待機させております」

「ありがとうございますクラーク。以上のように隔離施設は完璧なものとして完成しました。後は患者を移動させるだけになっております」

「分かりました」

国家主席が頷いた。

「この移動については各省庁と話し合い、一日でも早くできるようにします」

国家主席がテレビカメラに向かって喋った。　　続いてピエールがテレビカメラに向かい、

「患者の皆さん、移動は早急にすることになりますので、準備をしておいて下さい。お願いします」

　　と言い、報告書を手に持って喋った。

「このドーム内に移動する人口は、この報告書によると全地球人口の四十二・八六%の人が入ります。一人足りとも見逃しはしません。確実に全患者が入ることになります。そして、新ポイズ菌の保菌者は薬が効き、菌が死滅すれば家に戻れます。強力ポイズ菌の保菌者はまだ殺す薬ができておりませんので、しばらくはドームで辛抱してもらいます」

「これでポイズ系の菌の増加はなくなるわけですね？」

国家主席がピエールに質問をした。

「はい、完璧です」

「それは安心しました。ではドーム内での生活は、どんなですか？」
「ドーム内の居住区は、普通の住居とほとんど同じです。もちろん通信施設も同じものが取り付けてあり、いつでも家族との会話ができます。ただ直接会うことができないだけで、あとは全て今の生活と一緒にするのであまり心配はいりません」

ピエールは再びテレビカメラに向かい、心配しないよう話した。
「それでは次の問題に入ります。全地球人の男性と女性に分けて検査した報告書がここにあります。これは妊娠をしないという事実から、義務で行ったものであり地球の将来が掛かっております。全地球人口の十八歳以上は、ポイズ系の保菌者を除くと四十一・二二%です。この四十一・二二%の男と女の比率は、約六対四であります。男性六、つまり全地球人口の約二十五%。そしてその内の九十%の精子に異常が発見されました。これは、このままでは絶対に妊娠させる力のない精子です。そして、残りの十%はかなりひ弱な精子であり、よっぽど卵子がしっかりしていなければ、妊娠はしない精子であります。女性の方の約十六%に対しては、八十%が正常な卵子を持っていることが分かりました」

環境大臣のオットーが手を上げた。

「はい、環境大臣」

「それでは全地球人口の男性は約二・五%、女性は約十三%の者は、妊娠できる可能性があるということですね」

オットーが素早く計算をして喋った。

「そうです。おっしゃる通り、可能性があるということだけです。男性の二・五%は、絶対ではなく、可能性があるかも知れないという結論ですから」

「分かりました」

「この男性の病弱精子を救うため、色々な実験をしております。体育大臣、その報告をお願いします」

体育大臣のツルガノフは、まず平和過ぎる現代社会の話をした。

精神的無気力感に陥っている体を、いじめることによって肉体的ストレスに変え、人間の本能を元に戻すための色々な実験をしていると説明した。その結果、若干の者に精子の活力が戻って来た。ただ、まだ妊娠をさせる能力にはなっていないので、もう少しの時間を必要だと説明した。

続いて、生物大臣のバツハが動物実験の話をした。鼠から始めて、猫、犬、鹿、熊等、あらゆる角度から危険とも思える実験を繰り返したが、動物では人間と違って生殖という行為は一定時期に限っており、何の成果も見い出せなかったことを発表した。

「それでは、体育大臣の実験の方は引き続き行ってもらい、この二・五%の男性と十三%の女性について、どう進めて行くか良い案を願いたい」

ピエールが、一堂を見て言った。

「はい」

環境大臣のオットーが手を上げた。

「我々人類が絶滅しない唯一の方法は、この十三%の女性が子供を生んでくれなければいけないわけですね」

「その通りです。この十三%の女性は地球の宝です」

「そうだ、その通りだ」

他の大臣から声が掛かった。

オットーが続けた。

「又、二・五%の男性も地球の宝です。この二・五%の男性には体育大臣の実験についてもらい、十三%の女性については国家が保証をし、一ヶ所にまとめたらどうでしょう」

「そんな馬鹿な！」

自治大臣の石橋が怒鳴った。

「まあまあ」

ピエールが石橋を止めた。

石橋は、ちよつと興奮を押さえて喋った。

「一番大事な正常な女性たちを一ヶ所にまとめるなんて、できるわ

けないじゃないか」

「でも、そうでもしなければ十三%がどんどん下がってしまう。それこそ地球の損失だ」

オットーは石橋にではなく、国家主席に向かって喋った。

「環境大臣の言うことはもっともだと思うが、その前に全ての人たちの理解と協力が必要になってくる。この理解と協力をしてもらうために、全地球人に現状をもっと把握してもらいたい。私の意見は徐々にと言うことです」 国家主席も非常事態は分かっているが、あからさまにオットーの意見に即、賛成はできなかった。もし自分の口からすぐそれを実行したいなどと言ったら、会議はもとよりテレビを見ている国民はパニックに陥るであろうことを予測できたからだ。

「もし仮に、その時が来たら環境大臣、あなたならどうするつもりですか？」

自治大臣の石橋が質問した。

「その時は地球のためと言うことを充分認識して頂いて、正常な女性の卵子に正常な男性の精子を受精させます」

「それは分かりますが、どういう状態です？」

「感情を捨ててもらいます」

「充分に分かりました」

石橋は怒った表情で、

「正常な女性は全て妊娠ロボットになれと言うことですね」

と、怒鳴った。

オットーは表情一つ変えずコクリと頷いた。

ザワザワと会議が揺れた。

「もちろん、それなりの保証をしてお上ですが。そして主席のおっしゃる理解と協力の確定した上での実行です」

オットーの言葉は、いくらか遠慮深くなつて来たが、語尾は相変わらず強い。

「ちょっと待って下さい」

厚生大臣のピエールが口を挟んだ。

「まだ意見の段階で、決定事項ではないのですから、あまり感情を出さないで下さい。だれしもが非常事態の中なので気持は分かりませんが、全ての人が納得する意見を出してもらいたい」

ピエールも、オットーの言うことを半ばそうせざるを得ないだろうとは思っているが、この場ではこれ以上、この件で議論させるわけには行かない。テレビカメラが全ての出来事を家庭に送っているのである。

その後、建設的な意見はあまり出ず、確定したことは、ポイズ菌の保菌者は明日から町単位でドームに移動することになり、人口問題の方は、二・五%の男性について現在の仕事を取りやめ、毎日八時間体育大臣の指導の下で訓練を実施されることになった。十三%の女性については、看護ロボットと監視ロボットがついて、毎日の出来事を国の大型コンピュータに報告することに決まった。もちろん仕事は全て取りやめ、十分な保証の上での決定であった。

9

それから三十年の時が経った。

人類は全ての力を集約し、二つの難題に取り組んで来た。が、強力ポイズ菌を殺す薬はまだ開発されていない。人口減少問題についても、実験はことごとく失敗した。

ドームに移動した四十二・八六%の人間は、現在その数〇・二%の人間しか残っていない。

ドーム外に居る十三%の正常な女性の数は、その後に十八歳以上になった正常な女性を加えても、年齢的に困難になった数と、その後異常が認められた数を引くと全体で七%に落ち込んでしまった。

もっと酷いのは、二・五%の男性である。その後十八歳以上になった男性を加えても、正常に近いと診断された男性は、〇・〇五%になってしまった。

そして、この三十年間で生まれた人間は皆無であつた。

人類は焦りに焦り、環境大臣オットーの案を実行し、正常な女性の子宮に活力のある精子を送り込むことにした。しかし、それも時間だけが勝手に経ってしまうだけであつた。

人類の無法な生き方に、神様は天罰を下したのである。

そして、ついに国家も万策つきて崩壊した。ドームは解放し、国民はなす術もなく、全ての作業は中止し、ただじつと時の過ぎるのを待つだけであつた。

望みのない人間は、もはや会話もなく、荒廃した町を建て直すでもなく、ただただ、焦点の定まらない目でじつとしていた。

町の至るところには、人間の死骸があちこちに転がっており、悪病が発生し、倒れ行く人が更に広がって行つた。

「女王様、ついに我々の時代が来たみたいです」

バラモの子孫が、女王様に耳打ちした。

天文学的数の同士たちは、全地球を取り巻いている。そして、全ての生物の頂点に立とうとしている。

それは、知的な地下の住人、蟻であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7904p/>

人類滅亡そして・・・

2010年12月30日22時32分発行